

アメリカ人のイラン発見

森島 聡

20世紀初頭、イランの首都テヘランは、いまだ城砦都市であったものの、英露両国の資本により各都市、そして国外へと電信線が結ばれ、軍隊が容易に移動できる都市間の道路が整備され、銀行も設立されていた。1907年、英露協商を締結した両国は、イランの了解なしに、その領土を中立地帯と南北2つの勢力圏に分割した。第1次世界大戦では、イランは中立を宣言したにも関わらず、露軍が首都を占領するなど国家存亡の危機に瀕した。

1917年、ロシア革命が起こるとイラン領内に駐留していた露軍は撤退し、1921年2月にはイラン・ソビエトロシア友好条約が締結された。英国にとって、この状況はイラン北部に政治的空白が生じたことを意味した。

一方、第1次世界大戦では、石油資源の重要性が広く認識された。米国の石油メジャーは、当時、門戸解放政策に同調しながら、海外の石油資源探査を進めていた。この方針は、第2議会と第4議会で米国人の財政顧問を採用し、親米路線を取ってきたイランにとって、英国のアングロ・ペルシア石油会社(APOC)による石油資源支配から脱する好機と映った。

1923年6月、イランは、スタンダード石油に500万ドルの借款供与を条件に、北部5州の油田開発利権を与えようとしたが、同社が英側の圧力に屈しAPOCの50%資本参加に同意したため、利権供与を中止した。続いて、シンクレア石油が1000万ドルの借款供与を新たに提示し、イラン側は同社に利権を与える準備を行っていた。ところが1924年7月18日(金)、この交渉を決裂させる事件が発生した。

米国公使館副領事ロバート・W・インブリーRobert Whitney Imbrie少佐は、この日午後、テヘラン市内でその奇跡が話題となっていたサッカーハーネイエ・アーガー・シェイフ・ハーディーSaqqakhaneh-ye Aqa Sheykh Hadi⁽¹⁾で写真撮影を行おうとした所、「サッカーハーネ(共同水飲み場)に毒を入れたバブ教徒」という濡れ衣を着せられ、暴行を受けた。彼は重傷を負い警察病院に運ばれたが、暴徒は院内まで追撃し治療の甲斐もなく死亡した。結果としてシンクレア社の担当は、直ちにモスクワへ避難し、利権交渉は事実上決裂した。

イランの研究は、事件が政府の政策に対する民衆の抵抗運動に巻き込まれ発生した悲劇であると言及している。一方、米国の新聞は、事件の原因を単なる未開の宗教的妄信に求めている点が興味を引く。しかし、同時に軍⁽²⁾犯行関与も記述しており、米国がこの事件をどのように捉えたのか、今ひとつ判然としない。とは言うものの、マーメド・アッバーソフMamed Abbasov⁽²⁾が述べているように、米国は、この事件を通じて、イランにおいては政治的・軍事的裏付けなしに、いかなる経済的利益も上げることができないことを痛感したと言えよう。

(1)<http://www.iichs.org/Baharestan/Bahar6/vaghaye.htm>へリンク

(2) <http://www.khazar.org/jas/text/politics.html>へリンク

